

Views from Orienteering

村越 真



いつも校長を務める校庭でロゲイニングのディレクターとして子どもたちや保護者に競技説明をするのは妙な気分だ。説明が終わると子どもも家族も勢いよくスタートしていく

駿府ロゲイニング

静岡の中心部を使って、徳川に因むロゲイニングを一度はやりたいと思っていた。日本の中でも例外的な長期政権である江戸時代を築いた徳川家康が隠居して住んだ場所だけに、歴史に疎い私でも知っている史実の名残が街の至るところにある。どうせやるなら、静岡大学名誉教授の小和田先生に講演もお願いしよう。小和田先生は、戦国史が専門で、NHK 大河ドラマで戦国をやる時には必ず時代考証に名前が出る人だが、自分にとっては気軽にお願ひできる元同僚である。回ってきたばかりの史跡や由緒ある場所にまつわる話を聞いたら、歴史にも一層の関心が持てそうだ。

静岡市内中心部にある学校の校長になって、この願ひはより大きな意味を持つに至った。子どもたちに地図を読んでナビゲーションする楽しみを気軽に味わってもらいたい。保護者と学校の周辺を歩いて、防災上注意すべき場所を確認し、備えてほしい。学校行事との絡みや季節の良さを考えて、校長になって2年目の4月上旬に実施することになった。新学期に入っすぐなので、2月の保護者会の時には軽くアナウンス、そして3月中旬に全校児童にびらを配布した。同時に、一般に向

けても募集を開始した。トップ選手の走り、ナビゲーションスポーツの頂点の世界を見てほしい。

何人の参加があるかと、正直不安だった。ふたをあけてみると、学校の児童・保護者が120人ほど、チームで40だから、10%とはいかないまでもそれなりの高率だ。運営のキャパシティを考えるとちょうどいい数だろう。外部からも80人の参加があった。東京からの参加者がいる、と言うと学校関係者が驚いていた。それよりも驚いたのが、学校関係外部を問わず、欠席がゼロだった点だ。当日は春らしい天気、親子で町歩きを楽しむには絶好の天気だ。



学校の横にある駿府城の巽櫓と東御門。背後に見えるのは県庁。いつもは点でしか見えていない静岡の名所をストーリーとして見てもらえることができたろうか

「先生、この競技よくできてるね。ついでポイントいきたくなっちゃうんだよ。」普段は行く気にもならない賤機山の山頂にも行ってしまったという。秋のPTA行事でもやらないか、というくらいだからよほど面白かったのだろう。子どもや保護者向けであることを考えると、間口としてはまずまずの成功だろう。

オリエンティアの方からもわざわざ感想のメールをいただいた。「たったいま、足で回ってきた史跡のお話しをその分野の権威から直接お聞きすることができる」という言葉もいただいた。講演の直前に回って来たポイントの一覧をお見せしたら、その地図を見ることもなく、講演中に「みなさん、ここはおいでになったようですが、***があります」と、随所にチェックポイントにまつわる話しを入れていただいた。

ポイントを設定しながら、今川、徳川の歴史が安倍川という大河川の作った地形の上に成り立っていることが分かった。キャッチフレーズも「3つの川が作った静岡」とした。同じ参加者の方からいただいた、「ナビゲーションと地理、歴史が一体となった構成」というお褒めの言葉が嬉しかった。



ロゲイニングが終わった後の小和田哲男先生歴史講演会。今終わったばかりのポイントの説明をおりませながら、駿府の歴史を語って下さった。

世田谷ロケ

前号で紹介したように、東京で明治期の古地図でやるオリエンテーリングにはまっている。その余韻もさめやらぬうちに、世田谷ロケイニングが番外編として「多摩川今昔物語」をやるといふ話を聞きつけた。昭和初期の地形図を使うというが、郊外のこのエリアは、そのころはまだ市街化されていないはず。昭和初期の東京近郊の里山に遊ぶことができるのだ。

スタートとなっている世田谷の砧公民館に向くと、昔なじみのオリエンティアの顔も見受けられる。地図をもらったら、9時から11時の間に適宜スタート。ぬるい運営だ。昭和初期の世田谷は一部市街地化した部分はあるものの、東京郊外の田園の雰囲気の色濃く残している。多摩川対岸の川崎に至っては、たぬき、きつねも出てきそうな丘陵地だ。ようやく南武線こそ開通しているが、まだ田園都市線も小田急線も開通していない。多摩川がどこで渡れるかさえも定かではない。これだけは主催者から聞き出した。

この日はクラブ ajari のチャレンジナビゲーションも兼ねていたので、スタート前に、みんなで作戦検討をおこなった。南東の点数に目がくらんで時計回りを考えていたが、みんなのルートを聞いていたら、反時計回りがよさそうに思えてきた。人の意見は聞くものだ。



砧公園裏の緩やかな谷間をゆく。地図から等高線がよめれば、風景の中で斜面を探して地形を対応させることができる。

砧がある河岸段丘の立川面から斜面緑地を登って武蔵野面に入る。「昔の環八」というヒントに惑わされて、環八の周りを探し回るが見つからない。17点なので、諦めようということになって、西に移動すると、それらしい道路が見つかった。実際には環八から1本西側の道路だったのだ。平坦な場所は難しい。距離感もつかめない。歩測が有力な武器になるのは、大自然の中のオリエンテーリングと全く一緒だ。

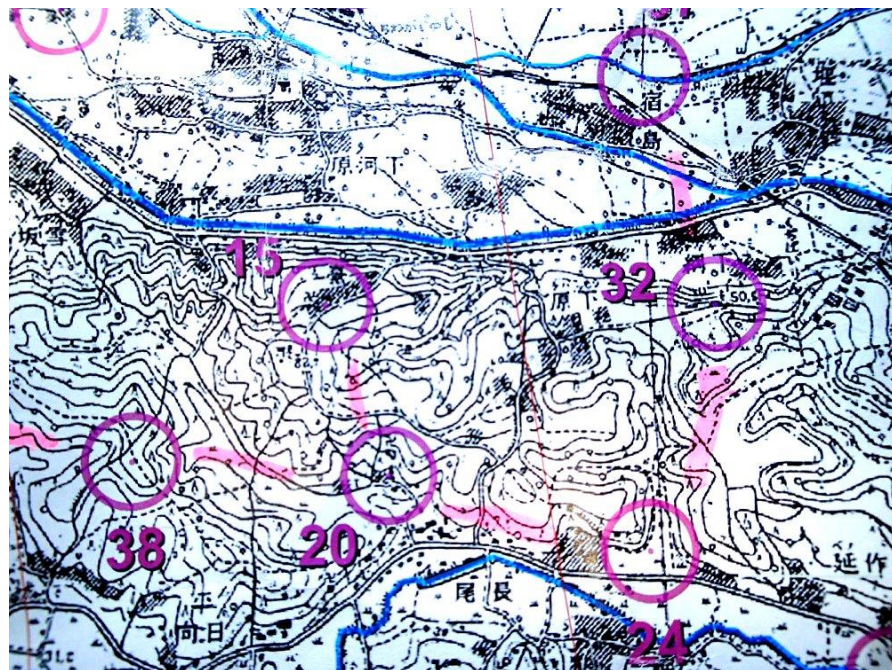
その後多摩川の下位の河岸段丘上の

CPを攻める。平坦に見えるが、昔の川筋があれば、それによるちょっとした段差が手がかりにできたりと、情報量の少ない地図だからこそ、これまでの地図読み経験とそこから得た地形に関する知識が最大限に活用できる。



この道は、地図では小川で描かれている。道の右側のコンクリートが、そこにかつて小川が流れていたことを教えてくれる。「不正確」な地図を読みこなすには、知識と推論が必要だ。

17番の教訓から、歩測をすることにした。地図上の目印をほとんど頼ることができない状態で、歩測でびたっとCPのエリアに近づき、ささやかな地形を拾ってCPに接近するのは、北欧でうまくいった時のような快感だ。後半は



多摩丘陵のポイントは等高線があるからむしろ楽。実際には住宅地だが、この地図で走ると、あたかも昭和初期の里山を走っている気分になる。

国道246が大幅に付け替えになっており、見当違いのところを探すというアクシデントはあったが、川崎の丘陵地はむしろ楽で、昔ながらの地形図で郊外の里山でオリエンテーリングをやっている気分だった。等高線の中に身を置くのは、楽しい。

古地図もマニアックなら、それを使ったナビゲーションをするのは、一層マニアックだ。だがエキセントリックを追求したところにナビゲーションの本質的課題が浮かび上がってくるのだ。目印の多いところに身を置く、自分の周囲を囲んで不安を解消する。これらは全て自然の中のナビゲーターがやっていることなのだ。1万円でいける「大荒野のナビゲーション」がそこにはあった。



トップランナー望月将悟さんの装備チェック風景。トップ選手はそれぞれ創造的な工夫をして、ルールを守りつつ荷物を最小限にしている。

UTMF

富士山一周 100 マイルのトレイルランニングレースであるUTMFも今年で3年目を迎えた。何が起るか分からない状態で初年度は終わった。そして3年目。4月上旬のこの時期は天気が悪かったら、相当冷え込むはず。今年も2週間前にはたっぷり雪が残っていた。減るとは言え、当日も少しは雪が残るだろう。コースも最高高度は2000m近くになる。100km以上走ってエネルギーの枯渇した選手が低体温症になるリスクはかなり高い。ましては、雨が降ればそのリスクは大きく高まる。過去2回は運が良かっただけなのだ。そして一週間前の週間予報では、大会の週末は雨。コース管理を手伝ってくれる宮内の口癖、「いつか天罰が下る」と言っているが、いよいよその日が来るかもしれない。

組織も心配だ。2000人以上を集めるイベント、参加費収入だけでも6000万を越える。ボランティアも数百人規模。一方で、運営するスタッフの多くは普通に仕事を抱えるボランティアだ。安全管理の責任者である私にしても、担当のスタッフ全てと意思疎通が図れている訳ではない。節足動物のような組織なのだ。安全管理は危急の事態があれば、一つの命令系統のもと、効率的に組織全体が動かなければならない。賢い神経節の働きが頼みの綱だ。

大会の開催にもう一つはなかったのは、自然保護の課題だ。昨年通過した富士山休養林は自然度が高く、通過に

ついては多くの条件がついた。私たちとしてはその条件をクリアすべく最大限の努力を払ったが、自然保護団体の納得までには至らなかった。交渉はぎりぎりまでずれこみ、大会1月半になってようやくコースが決まる始末。休養林を避けるために、当初予定した反時計回りでは実施できず、時計回りとなった。100km以上走った選手が標高2000m近い天子山地に入れば、高いリスクが予想される。このエリアに詳しい宮内と、そのリスクを低減するためのあらゆる手段を考え、実行に移していった。

その一つが西富士中学校での装備チェック。ヘッドライト、携帯電話、サバイバルシート、地図の4つに絞って確認したが、競技者の一人としても運営者としても勉強になった。トップ選手の多くはルールを守りつつ、そのグレイゾーンをうまくついで、ぎりぎりまで装備とその重量を絞っていた。残念ながら、中堅以下の海外選手には、地図を中心として不十分な人も多い。

必須である携帯電話を「落とした」という人もいる。本来は落とした時点で失格だろう。サバイバルシートを持っていない人もいる。義務づけているコースの詳細図を持っていない、スタートで、これでよいと言われたらといって全体がA4に収まる概略図しかもっていない人もいる。必須装備は何のためにあるのか、どのシチュエーションで何のために使うのか。必須装備は単なる遵守すべき規則ではなく、その背後に

アウトドアの中で想定されるリスクに対して自らの身を守るという考え方がある。それは直前のブログでもしつこいほど書いたのだが、それが完全に伝わっていないのは残念だった。

15時間連続して、装備チェックをするといろいろなことに会い、感じた。この環境の中で安全管理を行い、その考えを参加者に伝えるためには、自分自身ももっと修羅場を経験しなければならない。このレースに関わって初めて、自分も100マイルに出てみたいと心から思った。



柳下大選手の装備チェック。いい位置につけている。

(村越 真)